

小さな起伏を見せながら見渡す限り続く畑の畔に、点々とマンゴーの木が緑の葉を茂らせている。アフリカの中南部、ザンビアのチエワの人びとが住む村のはずれの風景である。雨季の初め、10月ごろになるとマンゴーの木が実をつけ始め、雨季のさなか、年が明けるころには、実が熟して食べごろを迎える。

この地域では、マンゴーの木の所有者はとくに定まってはいない。誰もが好きだけマンゴーの実を取り、そのままかじりつく。甘酸っぱいその果肉は、子供たちにとっては、この時季の格好のおやつとなる。

とはいっても、人びとは、け

みんなく 食の民族誌

考える舌

42

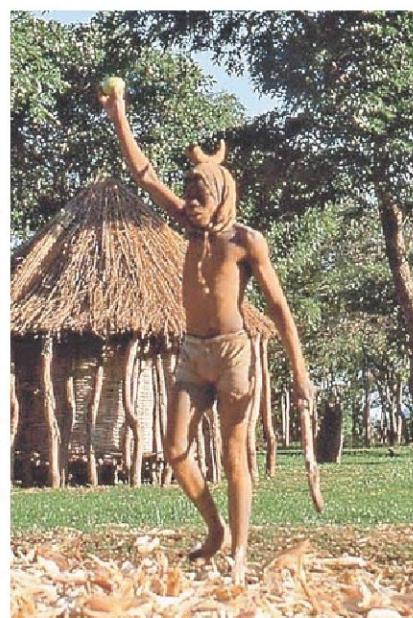
飢饉に備え果実の重み共有

や肉汁をつけて食べる。ただ、そのトウモロコシを満足に収穫できることは、近年では、まれになってきてはしない。

チエワの人びとの主食はトウモロコシである。乾燥した穀粒を粉にして、湯で練つてもち状にして、野菜

つして木にたわわに実ったマンゴーの実を食べつくしはしない。

がこの地を襲い、雨季の終わりになると、飢饉が人びとを見舞う。薪や建材用に樹木の伐採が進み、大地が十分な水分を保持できなくなっている。このため、わずかの日照りでも、干ばつ



ザンビアのカリザ村で、マンゴーを手に舞踊を行つ「フィシュー」に扮した男性
(筆者撮影)

ザンビアの仮面舞踊

吉田 憲司

千ばつ広がり穀物不作

このチエワの社会には、古くから男たちで構成される仮面舞踊の結社が存在する。鳥の羽根で全体を覆つた覆面や木製の仮面をかぶった踊り手はニヤウとよばれる。その多くは死者の化身とされて、葬送儀礼に登場するが、その中にフィシューという名のニヤウがある。このニヤウは、仮面はかぶらず、唇をめぐり上げ紐で縛り、頭には頬かむりをする。顔や体には、黄色い泥を塗りつける。フィシューは、毎年マンゴーの実が熟し始める11月ごろになると、まだ固いマンゴーの実を手にして村むらを練り歩く。「ウォー、ウォー」という声を上げ、人に出会

うたびにマンゴーの実を投げつける真似をする。熟していないマンゴーの実を探ると、容赦なく打ちずえるぞという威嚇である。実が熟すころには、もうこのフィシューが登場することはないが、大人たちは、マンゴーの実を採りつくすと、フィシューが来て連れて行かれると子供たちを諭す。飢えの時期への備えのためである。

アジア原産のマンゴーが、アフリカ中南部のチエワの地に導入されたのは、それほど古い時代のことではない。新しく導入された貴重な果樹と、古い伝統との結びつきが、フィシューという独特的の仮面を生み出したのである。

(国立民族学博物館教授)